東南アジア古典文化論 2011 年度冬季休業課題 「日本のラーマーヤナ」

次の課題に対する解答を A4 判レポート用紙 2 枚以内にまとめて休み明け最初の授業時（2011 年 1 月 12 日）に提出すること
（1 枚めの 1 行めに課題名、2 行めに氏名・学生番号・所属を明記、左上ホチキス止めにすること）

別紙の資料は日本の仏教説話集である『宝物集』（ほうぶつしゅう）に収められた物語の一つであるが，これは日本に伝わる「ラーマーヤナ」の一番古い記録である．『宝物集』は平康頼（たいらのやすより）が 12 世紀末（平安後期―鎌倉前期）に著した仏教説話集である．京都の嵯峨釈迦堂に参拝した康頼が，寺僧と他の参拝者たちの会話を記録したという体裁をとり，その会話の中に日本・中国・インドを舞台とする多数の説話が引かれている．「宝物集」に収められた「ラーマーヤナ」は，寺僧が，仏道を求める十二の道の一つとして「願」を立てることの大切さを説くときに，その例証としてあげているものである．

この資料をよく読んで下記の問いに答えなさい．各解答の初めに問題番号を明記すること．

1. 仏道を求める十二の道とは何かを調べ、そのなかで「願」がどのように位置づけられているかを説明しなさい．
2. 『宝物集』のラーマ物語の結論は「おぼろけにはかなひがたき願にぞ侍るめる」となっており、願を立てることの大切さを示す例話としてあげられていることがわかる．具体的には物語の中のどの部分が例証となっているのかを説明しなさい．
3. 『宝物集』のラーマ物語は，東南アジアに伝わる一般的な「ラーマーヤナ」と比較した場合，仏教に基づく点が大きく異なっている．具体的には物語のどの部分が仏教的な特徴をもっているかを説明しなさい．
4. 文末に「こまかには六波羅蜜経にぞ申しためる」と記されており，『宝物集』のラーマ物語が中国で漢訳された仏教経典を出典としていることがわかる．このことをふまえて、言語の点からみて，日本へのインド古典文化の伝わり方と東南アジアへのインド古典文化の伝わり方にはどのような違いがあるかを説明しなさい．
5. 4.の議論をふまえたうえで，日本の社会は「インド化」した社会と言えるのか，もし言えるとすればどのような意味でそう言えるのかについて自分の意見を述べなさい．
6. 物語について自由なコメント・感想・質問を述べてください。

宝物集（巻五）より

昔、釈迦如来、天竺の大国の王とむまれておはしましゝ時、国静かに、民おだやかにてすぐし給ふ程に、隣国に国あり、舅氏国といふ。彼国飢渇して、五穀種をたち、食物名字をきかず。このゆへに死骸道にみちて、ほとんど、国民餓死におよべり。舅氏国の人民相議して云く、「我等徒に死なんよりは、隣国の大国にむかひて、五穀をうばひとりて命をいくべし。戦のならひ、勢による事なし。一日と云とも存命せん事、こひねがふ所也」とて、すでに軍だつを、大国きゝつけて、万が一の勢なるがゆへに、かるめ、あざけりて、手どりにせんとするをきゝて、大王、大臣・公卿にのたまはく、「合戦の時、おほくの人死なむとす。ねがはくは戦をとむべし」と制したまひければ、「宣旨と申ながら、この事こそ、力および侍らね。我、合戦をこのむ事なし。隣国すゝみおそふ。たゝかはずは存命すべからず」と申侍りければ、大王ひそかに后をよびはなちて、「我、国王としてかせんをこのまば、おほくの人死なんとす。我、深山にこもりて仏法を修行すべし。汝いかゞおもひ給ふ」とかたらひ給ひければ、后、「大王をはなちたてまつらずして多年におよべり。今更にいかゞはなれ奉らん」とのたまひければ、「君は女人也。隣国来るといふとも、よもころし奉らじ。よく〳〵はからひ給へ」とこしらへたまひけれども、つゐに大王にぐして深山へ籠り給ひぬ。

大国の軍、国王のうせ給へりしことに驚きて、たゝかふ事なくして小国にしたがひぬ。大王深山にして、峰の木の実をひろひ、沢の若菜をつみて、おこなひたまひけるほどに、一人の梵士出来り、「大王のかくておこなひ給ふ事、希代の事也。我、御伽つかまつるべし」とてつかへ奉る。大王、有難、うれしくおぼしめしてすごし給ふほどに、大王峰の木の実をひろひにおはしたるまに、この梵士、后をぬすみてうせぬ。大王かへり、み給ふに、后のおはせざりければ、山ふかくたづね入給ふ。道に大なる鳥あり、二の羽おれてすでに死門にいり[ぬ]。大鳥、大王に申さく、「日来つきたてまつりたりつる梵士、后をぬすみ奉りてにげ侍りつるを、大王かへりたまふまでとおもひて、ふせぎ侍りつれども、梵士、竜王の形を現じて、二の羽をけをりたり」といひて、つゐに死門に入ぬ。

大王あはれとおぼして、高き峰にほりうづみて、竜王にてありけると云事をしりて、南方にむかっておはしましける程に、深山の中に、無量百千万の猿あつまりて、のゝしりける所へおはしぬ。猿猴、大王をみつけて、よろこびたのしとていはく、「我等年来領する山を、隣国よりうちとらんとするなり。明日午の時に、戦定るべし。大王を以[て]大将とすべし」といふ。大王おもひかけぬ所へ来りて、くやしく思ひながら、「うけ給ぬ」とてゐたまひたりければ、弓矢を以てきて、大王に奉れり。いふがごとく、つぎの日の午の時ばかりに、池にうき草なびきて、数万の兵をそひきたる。大王、猿猴[の]すゝめによりて、弓をひきてかたきにむかひ給ふに、弓勢人にすぐれて、臂、背中にまはる。かたき、大王の弓勢をみて、箭をはなたざるさきに、にげぬ。猿猴等大によろこびて、「このよろこびには、いかなる事をかせんずる」といひければ、大王、猿猴等につげてのたまはく、「我、年頃の后を竜王にぬすみとられたるゆへに、竜宮城にむかひて南方へゆくなり」とのたまひければ、猿猴等申さく、「われらが存命、ひとへに大王のちから也。いかでかその恩をおもひしらざらん。すみやかにをくり奉るべし」とて、数万の猿猴、大王にしたがひてゆく。

南海のほとりにあらざりければ、いたづらに日月ををくるほどに、梵天帝釈、大王の、殺生をおそれて国をすて、猿猴の、恩をしりて南海にむかふ事をあはれとおぼして、小猿に変じて、数万の猿の中にまじはりていふやう、「かくていつとなく竜宮をまもるといふとも、かなふべきにあらず、猿一して板一枚、草一把をまうけて、橋にわたし、筏にくみて、竜宮へわたらん」といひければ、小猿の僉議にまかせて、をの〳〵板一枚、草一把をかまへて、橋にわたし筏にくみて、自然に竜宮城へいたりぬ。竜王いかりをなして、大きなる声をおこして、くれをやりて光をはなつほどに、猿猴霧にゐひ、雪におそれてたをれふしぬ。小猿、雪山にのぼりて、大薬王樹と云木のえだを折て、かへり来りて、ゐひふしたる猿どもをなづるに、たちまちにゐひさめ、心たけくなりて竜をせむ。竜王、光をはなちてひらめきけるを、大王を以て射さす。竜王、大王の矢にあたりて、猿猴の中におちぬ。小竜等この事を見て、たゝかはずしてにげさりぬ。猿猴等、竜宮にせめ入て后をとりかへし、七宝をうばひとりて、本の深山にかへり、さて、彼舅氏国の王うせにければ、大国小国臣下等、此大王をしのびて、むかへとりて二ヶ国の王として有。猿丸の、竜宮城をせめてうちとらん事、おぼ[ろ]けにはかなひがたき願にぞ侍るめる。こまかには六波羅蜜経にぞ申ためる。